

控物次平形錢

娘の切着巾

堂胡村野

庫文空青

一

「あツ危ねえ」

錢形の平次は辛くも間に合ひました。夜櫻見物の歸りも絶えた、兩國橋の中ほど、若い二人の袂を取つて引戻したのは、本當に精一杯の仕事だつたのです。

「どうぞお見逃しを願ひます」

「どつこい待ちな、——そんな身投げの極り文句なんか、素直に聞いちや居られねえ」

「死ななきやならないわけがございます。どうぞ、親分」

争ふ二人、平次は叩きのめすやうに、橋の欄干に押付けました。

「頼むから靜かにしてくれ。俺は横山町から驅け付けたんだ。息が切れて叶はねえ、——意見をするのが面倒臭くなると、二人を縛つて欄干に晒し物にする氣になるかも知れないぜ」

「親分さん」

「解つたよ。三百八十兩の大金を巾着切にやられて、主人への申譯、言ひ交した女と

一緒に、ドブンとやらかさうといふ筋だらう」

「えッ」

「お前は、増屋ますやの養子徳之助、——此方はお富といふんだつてね」

「さう言ふ親分さんは？」

「神田の平次だ」

「あッ、錢形の——」

徳之助とお富は、死ぬ筈の身を忘れて、町の家並に傾かたむく櫻月の薄明りの中に、江戸第一番の御用聞と言はれた平次の顔を見直しました。

「横山町の店からの使ひで飛んで行つて見ると、——一度店へ歸つたお前が、お富と牒しめし合せて飛出したといふ騒ぎの眞つ最中だ。いづれは心中ものだらうと思つたが、永代へ行つたか兩國へ行つたか、それとも向島へ遠とほつばし走りをしたか見當がつかねえ、——兎も角、近間の兩國へ驅け付けて、幸ひ間に合つたからいゝやうなものの、これが永代へでも伸のされた日にや、今頃は三途づの川で夜櫻を眺めて居るぜ、危ねえ話だ」

さう言ふ平次の言葉を聞いて、

「——」

二人はゾツと襟えりをかき合せました。助けられた今になつて見ると、三途の川の夜櫻が、あまり氣味のいゝものではなかつたのです。

「さア行かうぜ。——店ぢや皆さんも大心配だ。わけでも増屋の旦那は、三百八十兩のことも忘れて、徳之助に若しもの事がなけりやいゝが——と居たり起つたり、神棚に燈明をあげたり、見るも氣の毒な程の氣の揉みやうだ」

「申譯もございません、——でも、私は此儘店へ歸つては濟まないことがございます」
「はてネ」

月明りの僅かに残る欄干らんかんに凭もたれたまゝ、徳之助は苦悶くもんに打ちひしがれて、濡れでもしたやうに、しよんぼりと語り續けました。

十三の年、親を喪うしなつた徳之助は、遠縁の増屋に引取られて、養子分で二十一まで働きましたが、増屋の主人三右衛門の慈愛が深まるにつれて、朋輩ほうばいの嫉妬やきもちが激しく、三百八十兩の大金を失つても、主人の三右衛門は許してくれるでせうが、番頭手代は、決して腹の中では、許してくれないだらうと——かう言ふのです。

その上、今日まで内證ないしよにして居た、お富との仲が、この心中騒ぎで一ぺんに知れたら、他の奉公人の手前、主人の三右衛門も、素直に許してはくれないかも知解らず、いづれにし

ても、二人揃つて増屋の敷居を跨ぐ^{また}のは、どうも遠慮しなければならぬやうに思はれる、と言ふのでした。

「それは一應^{もつと}尤もだが、金は働いて返す折もあるだらうし、二人の仲は、いづれは知れずに済まねえだらう。店へ歸つて、大恩ある主人に安心させるのが、何よりの孝行といふものではないか」

平次は口を酢つぱくして説き勧めますが、若くて一徹^{てつ}な二人は、心中の仕損ひの顔を、ノメノメと元の店へは持つて行く氣になりさうありません。

「それでは、私のお父^{とつ}さんは、直ぐ其處の濱町に居ります。行つて相談して見ませうか」

お富はかう言ふのです。漸^{やっや}く十九になつたばかり、増屋の奉公人には相違ありませんが、女隠居の相手をしてゐる可愛らしくも清らかな娘で、徳之助と並べると、歌舞伎芝居の道行を見るやうな、一種の情^{じやうしよ}緒^{かも}を醸^{かも}し出さずには居ません。

死出の晴着のつもりでせう。薄化粧に、一帳^{ちやう}羅らしい銘仙を着て、赤い帶も、黒い髪も、水へも火へも飛込みさうな、純情無垢の象徴に見えて、平次の目には危つかしくてならないのでした。

「それはいいが、店では心配してゐるだらう」

平次はまだ、増屋の大騒ぎが目に見えるやうな氣がするのです。

「親分——横山町へは、あつしが一と走り行つて來ますよ。二人を濱町へ連れて行つちや何うでせう」

月の隈くまの中から、長いく影法師かげぼしを曳ひいて現れたのは、錢形平次の子分、ガラツ八の八五郎の忠實な姿でした。

二

「お父とつさん」

「——」

「開けて下さいな、お父さん」

「誰だい」

「私わたしよ、お父さん」

お富はそつと入口の戸の隙間すきまに顔を當てました。

「何處の狐が化けて來やがつたんだ、畜生」

たまり兼ねて起出した様子、——火打鐵ひうちがねの音や、荒々しい足音にも、憤々ふんぶんたる怒りはよく判ります。プーンと匂ふ、硫黄附木いわうつけぎの匂ひ。

「そんな事を言はないで、お父さん」

お富はやるせない様子でした。幾度もく——徳之助がそのまゝ逃げ出しでもするのをおそ惧れるやうに、——振返つて後ろを見るのです。

「お店から先刻番頭さんが来て、手前の不心得は皆んな聞いてしまつたぞ、馬鹿野郎。死ぬなら勝手に死ぬがいゝ、親にまで恥を掻かしやがつて」

さう言ひ乍らも、内からガラリと戸を開けました。灯あかりを背負つた五十年配の屈強な親仁おやぢ、左官の彦兵衛といへば、仕事のうまいよりは、頑固ぐわんこ一徹てつなので界限に知られた顔です。

「お父さんとつ、さういはずに、相談に乗つて上げて下さい、——私達は本當に死ぬつもりだつたのを親分さんに助けられて——かうしてお父さんのところへ歸つて來たんです」

お富はさう言つて、後ろに立つた徳之助と、それから、錢形の平次を見やりました。

「——」

娘の沈んだ聲も、打萎うちしをれた様子も、彦兵衛の怒りを宥なだめる由はなかつたでせう。

「お父さん」

「主人の養子をそゝのかして、三百八十兩の大金を持出させるやうな、そんな娘を俺は持った覚えはねえ」

「お父さん、それは、違ひますよ。三百八十兩は巾着切きんちやくきりに取られ——」

「黙らないか。本所で巳刻前よつに受取った金を、わざく花時の向島へ持込んで、巾着切に取られる奴があるものか、——その上お店たなへ歸つたのは、薄暗たなくなつてからだつて言ふぢやないか」

「お父さん」

「さア歸つてくれ。俺まで泥棒の仲間なまこにされちや、賣り込んだ顔かゝに關かゝはる、——繩を附けて突き出さないのが、せめては親の慈悲だ」

彦兵衛は言ふだけのことを言ふと、娘と徳之助げうあんを曉げう闇あんの中に残したまゝ、沒義道もぎだうに戸をピシリと——

が、その戸は半分閉めかけたまゝ、錢形平次に押へられました。

「何をしやがるんだ」

彦兵衛は少し中ツ腹でした。

「彦兵衛、俺を忘れはしまいな」

「――」

「平次だ、――久振りだつたな」

「あツ、錢形の親分」

僅かに残る月^{つき}光^{あか}りに透^{すか}して、左官の彦兵衛は仰天しました。

曾^{かつ}ては淺草で左官をして居た彦兵衛、飲む、打つの道樂^{かう}が嵩^{かう}じて、一時は巾着切の仲間
にまで身を落しましたが、今から五年前、別れてゐた女房の末期^{いさ}の諫^{いさ}めに、翻^{ほん}然^{ぜん}として
本心に立ち還^{かへ}り、娘のお富を引取つて、神田で堅人に生れ變つた經^{いき}緯^{さつ}――平次は何も彼
も知つて居たのです。

お富は美しく清らかに生ひ立ちました。親父に巾着切の古^{ふる}疵^{きず}があるとも知らぬ清純さ、
それを見るのを唯一の樂しみに、彦兵衛は本當に眞つ黒になつて働き續けたのです。

嫁入前の一と修業のつもりで、増屋の女隱居附に奉公させたのは一年前。それは娘を仕
込む術^{すべ}を知らない、男親の淋しさでしたが、彦兵衛はそれも辛抱して、何の邪念もなく、
勤め上げて歸つて來るお富を待つて居たのでした。

それが、お店の養子^{たな}と勝手な事をして、三百八十兩の大金を持逃げたと番頭に聞かさ
れ、罪の遺傳の恐ろしさに、彦兵衛は打ちひしがれ乍ら、寢もやらず待つてゐると、顔見

知りの錢形の平次に送られて、怪我もなく立ち戻つて來たのです。

飛び付いて引摺り込んで、二つ三つ横つ面を張り飛ばして、それから犇^{ひし}と抱きしめて、泣けるだけ泣いてやりたいやうな心持を我慢して、彦兵衛は沒義道に戸を閉めたのに、何の不自然があるでせう。平次が止めてくれなければ、お富が泣き濡れて、父親の胸に嘔^{かじ}り付くに定つて居るやうに思へたのです。

「ぢや、あの、娘を助けて下すつたのは？」

彦兵衛の照れ臭さ。

「俺だよ、彦兵衛」

「――」

「濱町で堅氣に暮してゐるとは聞いたが、お富の親がお前とは知らなかつた、――それにしても、五年前の彦兵衛とは、打つて變つた心持、この平次もすっかり感心してしまつたよ」

平次は灯^{あかり}の中に全身を現すと、斯^かう心から老巾着切の心境を褒めるのです。

「恐れ入ります、親分」

「それにつけても、お前の考への間違つてゐることだけは言はなきやなるまい。番頭は何

と言つたか知らないが、三百八十兩の金は、たしかに巾着切にやられたに違ひない。二人の様子で、この平次は潔白けつぱくを見届けたよ」

「へエ——」

「兩國橋から飛込まうとするのを、どんなに骨を折つて止めたか——捕繩を出して、欄らんか干へ縛らうかと思つた位だ。人間は、見榮や洒落しやれで、夜中過ぎの大川へ、女づれで飛込めるものぢやねえ」

「——」

「増屋の主人は、徳之助の正直をよく見抜いていらつしやる。奉公人達には嫉ねたみもひがみもあるだらうが、主人の信用さへ變らなきや、少しも驚くことはない——」

「へエ——」

彦兵衛はポロポロと涙をこぼして居りました。錢形平次が保證してくれれば、もう大手を振つて江戸中を歩ける二人です。

「お富との仲が一ぺんに知れ渡つて、此儘では横山町の店へ歸りにくいといふだけの話さ。お前もよく若い二人に言ひ聞かせてくれ、——さア入つたく、父とつつあんは苦勞人だ、よく解つてくれるよ」

平次は兩方へさう言ひ乍ら、有明月の隈くまに小さくなつて居る二人を招きました。

三

貧しい灯の下に、二人を押し並べて、平次と彦兵衛は、死ぬ氣になつた無分別を叱つた。
なだり宥めたりしました。

「三百八十兩は大金だが、増屋の主人は締あきらめてゐるし、奉公人並といつても、養子のお前だ。一生眞面目に働いて、身しんしやう上を肥らせる氣になれば、三百八十兩は安い資本のやうなものぢやないか」

平次はさう言つてやります。

「金せえありや、俺の手で何とでもするが、こんな暮しをして居ちや、三百八十兩は愚おろか、三兩二分も覺おぼつか束ねえ」

彦兵衛は口惜くやしがるのです。惡事に榮えた昔の事を思ひ出したのでせう。

「正直者はそれが本當さ、——ところで、どんな野郎が抜いたんだ。三百八十兩が懷中から消えた後あとさき前のことを、少し詳くはしく聞かして貰はうか」

と平次。

「相生町のお華客で、三百八十兩、小判で受取つたのは已刻少しまへでした。眞つ直ぐに兩國へかゝると、橋の袂で何處かの小僧さんが待つて居て、『増屋の主人が小梅の寮に居るから、其方へ持つて行くやうに』といふ傳言です」

「フーム」

「別に疑ふ心持もなく、向島へ行くと、丁度花は眞つ盛り、晝前だといふのに、土堤は、こぼれさうな人出です。その間を縫ふやうに、言問の近くまで——實は飛んだ儲けもののつもりで、花を眺め乍ら行くと、いきなり突き當つて喧嘩を吹っ掛けたものがあります」

「どんな野郎だい」

彦兵衛は横合から口を出しました。

「小鬢の禿げ上がった、薄あばたの男で」

「フーム」

「二つ三つ殴られて、土堤の下へ轉がされると、——それ喧嘩だツ——といふ人ばかり」

「——」

「漸くハネ退けて飛起きると、相手は人混みの中に飛込んで何處へ逃げたかわかりません。」

ハツと氣が付いて懷中を見ると、三百八十兩の小判を入れた財布は、紐を切られて抜かれてしまつたのです」

「あの野郎、やりやがつたな」

彦兵衛は思當ることがあるらしく、拳固^{げんこ}で鼻の頭を撫で上げ乍ら、詰め寄りました。

「びつくりして、氣違ひのやうに駆け廻りましたが、相手は何處へ逃げたか、影も形もありません。小梅の寮へ行つて見ると、旦那が此處へ來てゐるといふのは眞つ赤な嘘、よく企^{たくら}まれたと氣が付くと私はもう、死んでお詫^わびをするより外に思案もなくなりました」

「――」

「日の暮れるまで死場所を探して、彼方此方歩きまはりましたが、何處へ行つても花見客でパイ、日が暮れると足は横山町の方へ向いて居りました。お富に逢つて一と言、別れの言葉が言ひたかつたのです」

徳之助の肩はガクリと落ちて、鬢^{びん}のほつれも、白い頬も、あはれ深い姿です。

「一緒に死なうと言ひましたのは、この私でした。お父さん、堪忍して下さい。――お父さん一人残して死ぬと思ふと、胸が張り裂^さけるやうでした。でも、徳之助さん一人殺して、私は生きてゐる氣がしません」

後ろからお富、伸した手はそつと、父親の膝小僧へ――

「ば、馬鹿なツ。親父をつかまへて、惚氣のろけを聞かせる奴もねえものだ、ヘツ、ヘツ」

彦兵衛ははふり落ちる涙を、横なぐりに拂つて、歪ゆがんだ笑ひを絞り出して居ります。

「ところで、彦兵衛。その巾着切の薄菊石うすあばたを、お前は心當りがありさうだが――」

平次は職業意識を取戻しました。

「それですよ、親分。若い者には聞かせたくねえ話で、――ちよいとお顔を」

彦兵衛は目顔に物を言はせて、滑るやうに明けかゝつた街へ出ました。

それを追つて平次。二人は暫らく無言のまゝ、濱町河岸に立つて、銀鼠から桃色に明け

て行く大川端の春を眺めて居ります。

「彦兵衛――薄菊石うすあばたの巾着切きんちやくきりは誰だ。早い方がいゝ。今から手を廻したら、金が戻

るかも知れねえ」

平次は口を切りました。

「描き菊石あばたの東作とうさくといふ野郎で、――仕事をする時だけ、自分の顔へ繪の具で菊石を描

くほどの用心深い奴ですよ」

「何處に居る、少しでも早い方がいゝ」

「ね、親分さん、——これはあつしに任せて下さいませんか」

「——」

「十手捕縄ぢや——そんな事を言つちや悪いが、後口のよくねえことがあります。彦兵衛が一世一代、身體を張つてきつと型をつけます。こいつはあつしに任しておくんなさいまし」

彦兵衛は思ひ切つて斯う言ふのです。

「それはまた、どうしたわけだ」

と平次。

「増屋の嫁にならうといふ娘の耳に、あつしの素姓すじやうを知らせたくはありません。——それにあの東作の仕事振りを、あつしはよく知つて居ります。これは企たくらみに企んだ上のこと

で、金を隠して、描き菊石を洗つて居た日には、親分が踏込みなすつても、どうすることも出来ません」

「その時は手前てめえが活證人いきじようじんになつてくれるだらう。なア、彦兵衛」

「なれと仰しやればなりますが、その代りあつしの素姓は明るみに曝さらされて、娘は死ぬほど焦こがれても、増屋の嫁になれつこはありません——相對死を助けて貰つても、一人死をさ

せちや、反つて不憫ぢやございませんか、親分

「――」

「三百八十兩の金を取り戻し、徳之助とお富を無事に増屋に歸した上で、菊石の東作を縛るなり叩くなり、勝手になすつておくんなさい。ね、親分——錢形の親分さんを見込んで、この彦兵衛が一生一度のお願ひでございます」

何時の間にやら彦兵衛は、朝の大地の上に崩折くづれて、錢形平次を拜んでゐたのです。

「よし、判つた。たつた三日、日眼にちげんを切つて待つてやらう。手前の改心を見届けた平次がああの可愛らしい娘への土産代りだ」

「有難うございます、親分」

「いゝよ、俺は拜まれるのはあんまり好きぢやねえ——大變な泥だぜ、仕様がねえなア」
平次は彦兵衛を起してやつて、その胸から膝へ一面に附いた土つちほこり埃を拂つてやりました。

もう出始めた街の人達、酔つ拂ひの介抱とでも思つたのか、それを遠巻に見て居るのでした。

四

田原町の經師屋東作、四十年輩の氣のきいた男ですが、これが描き菊石の東作といはれた、稀代の兇賊と知る者は滅多にありません。

その奥の、思ひの外贅を盡した一と間に、主人の東作と、左官の彦兵衛は相對しました。「久し振りだね、彦兄イ。眼と鼻の間に住んでゐても、稼業が違ふと、斯うも逢はないものか」

東作は澁い茶一杯掩れるでもない冷たい態度で、少し茶かし加減にかう言ふのでした。「お蔭で地道な貧乏暮しも四年と續いたが——今日はね東作、少しお願いがあつて來たんだが」

彦兵衛は居心地が悪さうにモチモチし乍ら、思ひ切つた様子で切出しました。

「ハテネ、堅氣のお前さんからの頼み、といふと、袋戸棚の唐紙でも貼つて貰ひたいと言ふのかい」

東作は煙草盆を引寄せて一服吸付け、長閑な煙を長々と吐きました。プーンと高貴な、國府の薰り——。

「外ぢやねえ。昨日向島で抜いた、増屋の息子の三百八十兩」

「何を言ふんだい、彦兄イ。向島だの、三百八十兩だのと——俺はもう惡事とは縁切りさ。三年前から堅氣になつて、近頃では左官の彦兵衛と同じやうに通用する經師屋きやうじやの東作だ。可怪をかな事を言つて貰ひたくないね」

「さうでもあらうが東作、——俺が聞いた手口は、昔のまゝの描かき菊石あばただ。あの三百八十兩を抜かれたばかりに、昨夜は兩國橋から、危なく若い二人、身を投げるところよ」

「一人は彦兄イの——娘お富さんとか言つたね」

「それまで知つてゐるなら、言ふだけ野暮やぼだ。なア、東作、昔の誼よしみ。その三百八十兩を、この彦兵衛の顔に免じて返してくれ、きつと恩に被きる——」

「それぢや彦兄イ、本氣でそんな事を言ひに來たのか」

「本氣も、本氣この通りだ。娘の命にも關かはること、愚ぐに返つた彦兵衛が一生の頼みだ。聞いてくれ、東作」

彦兵衛は兩手を疊に下ろして、涙ぐんでさへ居たのです。

「やい、彦兄イ」

「——」

「いやさ彦兵衛。年のせるかは知らねえが、大層手前はボヤケやがつたな」

東作は銀煙管を逆手構さかてがまへに、火鉢を小楯こだてに取つて屹きつとなりました。

「東作、頼む」

「東作々々、と、安くして貰ひたくねえ。昔は悪黨仲間の兄イ分だらうが、——稼かせいだ金をそつくり返せといふのは、こちとらにはねえ仁義だ。巫山戯ふざけた事を言やがると、彦兵衛だらうが朴念仁ぼくねんじんだらうが、勘辨しねえぞ」

「解つたよ、東作。手前の腹を立てるのも無理はねえが、——俺の方にも少しばかり言ひてえことがある」

「——」

「娘の命を助けたのは、他ぢやねえ、錢形の平次親分だ。三百八十兩抜いたのは、描かき菊あ石ばたの東作と話すと——」

「何？」

「まア、待つてくれ。俺は一生懸命平次親分を宥めて、三百八十兩は、見事この彦兵衛が貰つて来るからと、漸く引取つて貰つたのは、ツイ先刻だ」

「それぢや、手前、錢形の平次に、この俺の事までベラベラと饒舌つてしまったのか」

東作はカンカンに腹を立て乍らも、襟元の薄寒さを感じました。錢形平次に睨まれることは、悪黨仲間に取つても致命的な恐怖です。

「娘の命を助けたさの行きがかりだ——それは仕方があるものか。三百八十兩の金を返してくれさへすれば、平次親分に頼んで、今度のことは眼をつぶつて貰ふ工夫もあるだらう。なア、東作」

「御免蒙らう」
かうむ

「何？」

「岡つ引に脅かされて獲物を吐き出したとあつちや、この東作の名折れだ。今直ぐ長い草わ鞋らぢを穿くまでも、そいつは御免蒙らうよ」

「どうあつてもか、東作」

「いやに東作、東作つて言やがるぢやないか。誰が何と言つても嫌だよ。判つたかい、彦兵衛」

「野郎ツ」

二人は睨み合ひました。争鬭を始める一瞬前の猛獸のやうに——。

「ハツハツハツハツハツ、年は取つても、娑婆しゃばつ氣は抜けねえぜ。飛んだいゝ氣合だよ、

彦兄イ」

急に笑ひ出した東作の顔を、彦兵衛は眉も動かさずに睨み据ゑます。

「三百八十兩、事と次第によつては、随分返してやらないものではないが、その代り、禮はするだらうな、彦兄イ」

「禮？——それはするとも、その日暮しの左官には、どうせろくな禮も出来ないが」

彦兵衛は緊張が緩^{ゆる}んで、思はず肩を落しました。相手の様子に妥協的なものを讀んだのです。

「禮と言つたところで、錢や金ぢやねえ」

「——」

「俺には少し望みがあるんだ。——外ぢやねえ、三百八十兩返しや、徳之助も無事に増屋に納まるだらう。お富とはどうせない縁と二人を諦めさせて、お富をこの東作の女房にくれる氣はないか」

「な、何だと」

東作は大變なことを言ひ出しました。

「それが嫌なら、増屋へ乗込んで、手前の素姓を皆んなバラしてやるまでよ。江戸で指折

の^{おほだ}大店が、巾着切の娘を嫁にするかしらないか。こいつは面白いぜ、なア彦兄イ」

「手前それは正氣で言ふのか、東作」

「正氣も正氣、この通り、酔つても寢ぼけても居るわけぢやねえ。年は少し違ふが、まだ厄^{やくまへ}前の東作に、十九のお富が不釣合とは言はさねえ。巾着切の娘が巾着切の女房、こんな似合ひの縁があるものか」

「野郎ツ」

「まア、怒るな、彦兄イ。俺は二三年前から、お富坊に眼をつけて居たんだ、——この縁談さへ承知なら三百八十兩は結納^{ゆひなふがは}代り、熨斗^{のし}をつけて差上げるよ」

「——」

東作の太^{ふて}々^{／＼}しさと、その企^{たくら}みの深さに壓倒されて、彦兵衛は燃ゆる眼に宙を見たまゝ、血の出るほど唇を噛みました。

濱町の家では、お富と徳之助が、平次に言ひ宥^{なだ}められ乍^{なが}ら、事情を知らない乍らも、何やら吉報らしいものを待つてゐることせう。

五

お富を一人残して、徳之助だけ店へ歸すのは、彦兵衛の方では不可能なことでした。死の一步手前まで行つた二人は、恥も外聞も、義理も體面も捨てて、もう一瞬も側を離れようとはしなかつたのです。

幸ひ、増屋の主人三右衛門からの傳言で、二人を一緒にする前提として、暫くは世間體を兼ねて、お富は濱町の父親の許に留めるのが穩當だらうといふことになり、迎ひに來た手代に連れられて、灯の入る頃、徳之助は漸く横山町へ歸る氣になりました。

「お富、——若旦那はお店へ歸つたが、三百八十兩の金が戻らなきや、親類方や古い奉公人の手前、増屋の跡取りに直るのがむづかしい事は、お前にも判るだらうな」

改めて彦兵衛は、娘に因果を含めるのでした。

それは併し、何の前提やら父親の氣持を測り兼ねて、お富は美しい瞳を舉げました。

「増屋から追出されても、裏長屋に住んでも、二人一緒に暮せるから——とお前は思ふだらうが、それぢや世上の義理が濟まねえ」

「男の出世を妨さまたげるのは、何と言つてもつれ添そふ女の恥だ。解るか、お富」

「え」

「それが解るなら、今晚ほんの暫く、厭いやな客に付き合つてくれ——三百八十兩の手土産を持つて来る客だ」

「お父とつさん、それは？」

「察しの通り巾着切りの東作といふ男だが、深いわけがあつて、表沙汰にしたくないのだよ。判るか、お富」

子供の時別れて、五年前母親の臨りん終じゆうの床とこで、久振りに逢つた父親ですが、それから五年の間の愛育は、世の常の五十年の恩にも超こえて深いものでした。

世に斯こんな良い父親があるといふことは子として、何といふ誇ほこらしいことでせう。

お富は何時でも、半白の鬢びんから、後光が射すやうな心持で、父親彦兵衛を見て來たのです。

「お父とつさん、——私には何にも判らないけれど、お父とつさんが良いと思ふことならどんな事でもやつてみませう」

お富はそれほど父親を信頼し切つて居たのでした。經師屋東作、描かき菊石あばたと綽名あだなのある

大悪黨が、押掛け簪に來ることは元より知る由もありません。

間もなく、東作が町駕籠で乗込んで來ました。

「爺さん、西刻だ、早過ぎはしないだらうね」

さすがに極りが悪かつたものか、少し面を冠つて、笑み割れた頬が、とろけて落ちさうなものも無氣味です。

「まア入^{へえ}んな、——お富、お富、俺の古馴染の東作さんだ。挨拶をするがいゝ」

狭い家、逃げも隠れもならぬお富は、行^{あんどん}燈の蔭に小さくなりました。

「お富坊、相變らず美しいことだな。今晚から俺は此處の人だよ、お前とは——」

「シツ、餘計ことを言ふな。若い者は吃驚するぢやないか」

彦兵衛は精一杯の眼顔を働かせます。どうしても承知しなかつた東作を説き落して、お富との祝言は、いづれ徳之助と縁が切れてから、改めて盃^{さかづきごと}事をするとして、今晚はほんの見合だけ——といふ事で話をつけたのです。

「ヘツ、ヘツ、ヘツ、さう言つたものかいなアお富坊かう見えても、俺は日本一の親切者さ。お富坊に氣に入るやうに、三百八十兩の金はちやんと此處に持つて來たよ。次第によつちや熨^{のし}斗をつけないものでもない——なアお富坊、今晚にもこの俺の女房になる氣はな

いかえ」

しな垂れかゝる四十男の醜さ、お富はゾツと寒氣がして、父親の背後に逃げ込みました。
「お富、——あれほど言つて置いたぢやないか、しやく酌をして上げな」

「ハイ」

「なア、東作。夜は長げえ、先づ御輿みこしを据すゑて飲むがいゝ、——そのうちにはお富も、一と晩経てば、一と晩だけ年を取るといふものだ」

「その代りお互ひも一と晩年を取るぜ、ヘツく。だが、全く堪たまらねえぜ、——お富坊の酌で飲むなんて、俺は三年越夢に見た圖だが、昨日きのふまでもこんな幸せにあり付かうとは思はなかつたよ」

「だからよ、存分に飲みな」

「介かい抱はうはお富坊に頼むか、ゲープ」

東作は鯨くじらのやうに飲みました。逃げ腰のお富は、彦兵衛に眼で叱しかられて、觀念し切つた手に銚子を擧げるのです。これが徳之助を救ふ方法と聞かされなかつたら、どんなに父親が引止めたところで、四半刻とも我慢をするお富ではなかつたでせう。

西刻むつから亥刻よつまで、呑んで、呑んで、東作は到頭正體を失ひました。

「いゝ鹽梅あんばいに眠たやうだ。お富、枕を持つて來な、——それから、行燈あんどんを退どかせるのだ」

「——」

黙つて行燈を退のかせ、杯盤はいばんをざつと片附けて、お富は部屋の隅に顛へて居ります。

「驚くことはない。少し靜かにしたら、よく落着くだらう」

「——」

「飛んだ獸けだものに附合ひさせて、氣の毒だつたなア。お富、その代り、この跡始末は俺がしてやる」

彦兵衛は亂酔して、正體もなく眠りこけた東作の側に膝行みざり寄りました。

「お父さんとつ」

お富は思はず聲を出しました。父親の手が妙に物馴れた滑らかさで、何にも知らずに眠つてゐる、東作の懷中にスルスルと入つて行くではありませんか。

「抜かれた物を抜くまでのことだ。驚くことはない」

ズルズルと抽出ひきだしたのは、蛙を呑んだ蛇のやうに、恐ろしく脹ふくらんだ胴卷。

「ウ、ウン、ウ、ウ」

うなされた様に、寢返りを打つ東作。

「――」

彦兵衛の右手には、キラリと^{あひくち}匕首が光りました。

「お父さん^{とつ}」

「大丈夫だ、心配するな。こんな毒蟲は、人助けの爲に命を取つても仔細^{しさい}はないが、俺は卑怯^{ひけふ}な人殺しはしねえ」

「――」

「お前はその胴巻を持つて、横山町の増屋へ行つてくれ、――此處にまごゝして居て、此野郎が眼を覺すと、後が面倒だ」

「お父さん」

「手觸りでもよく解る。中は確か三百八十兩。少し重いが、男一人の命にも關^{かゝ}はつた金だ、しつかり持つて行け」

胴巻を娘の帶の下へ廻し乍ら、彦兵衛はさう言ひ續けます。

もう子^{こゝのつ}刻近いでせう。街は灰を撒^まいたやうに鎮まつて、朧^{おぼろづき}月の精のやうに、ヒラヒラと飛んで來る花片。

「お父さん、それぢや」

お富は三百八十兩の小判を背負^{しよ}つて、一步眞夜中の街へ踏出しました。

「命がけの金だぞ、お富」

「ハイ」

「これが暫くの別れにならうも知れない」

「お父さん」

「なアに、そんな事があるものか。明日は又逢はう、いゝか、お富」

六

娘を夜の冒険に送り出して、引返した彦兵衛。行燈の灯りの中に、動物のやうに亂^{らん}醉^{すゐ}した身體を横へた東作を、憎々しく見詰めましたが、いきなりハタと枕^{まくら}を蹴つて、

「野郎、起きろ」

低い^おが、壓し付けるやうな聲を浴びせました。

「ウ、ウ、ウ」

ゴロリと寝返りを打った東作、それ位のことでは、なか／＼目を覺しさうもありません。

「只の洒だと思つて、よくも食ひやがつたな、畜生ツ、何うするか見るがいゝ」

勝手から持出した手桶てをけ、井戸端へ行つて二た釣瓶つるべまで汲み入れ、滿々と水を湛たへたのを

持つて、東作の枕元に突つ立ちました。

「水垢離みづごりを使はせてやる、驚くな」

高々と持ち上げた手桶から、ドツと一條の飛瀑ひばく、熟睡した東作の眼へ鼻へ口へ、いや、

顔も襟も胸も、上半身一ぱいにブチまけたのです。

「ワツ、な、何をしやがる」

ガバと飛起きた東作。

「騒ぐな、家は借家だ。望みとあらば、もう二三杯食はせてやらうか」

手桶を振り冠つたまゝ、彦兵衛の啖呵たんかは虹を掛けます。

「や、や、胴巻を抜きやがつたな」

立ち上がつて自分の懷中を搜さぐつた東作、さすがに酒の酔よひも覺めました。

「當り前めえよ、油斷をした懷中から抜くのは巾着切の手柄だ。ざまア見やがれ」

「爺奴ぢいめ、一杯食はせたな」

濡れ腐^{くさ}つた衾^{あはせ}をかなぐり捨てると、逞^{たく}ましい素^すつ赤裸^{ばだか}、東作は行燈を小楯^{こだて}に屹^{きつ}と身構へます。

「金を抜いて娘をくれと抜かしやがつたな。手前^{てめえ}は江戸の中着切の面汚^{つらよご}しだ。辯天様のやうな娘を、そんなモモンガアの餌^えにしてたまるものか。少しは目が覺めたか、馬鹿野郎
ッ

「その娘をヌケヌケと増屋の嫁にする氣だらうが、そんな甘いわけに行くものか」

「俺の方でも、手前を錢形の親分に引渡す筈だが、——昔の誼^{よしみ}、繩を打たせちや氣の毒だ」
「何を、老ぼれ」

「何方も抜き差しならねえ破目^{はめ}だ。仲間の仕來りは、こんな時には二挺^{てう}の匕首^{あひくち}に物を言はせる外はねえ」

「何？」

「さア、そいつを持つて柳原の土堤^{どて}まで來い。地獄の旅へ、何處が先に踏出すか」

ガラリと投げた匕^{あひくち}首、行燈の影から手を出して、東作はあわてて一挺を拾ひました。

「しやら臭え、來いッ、爺奴」

二人は毬^{まり}の如く、朧^{おぼろづき}月の街に飛び出したのです。

それから一と月、江戸は青葉の風薫^{かを}る頃となりました。三百八十兩を取り返したのは、彦兵衛お富の親娘^{おやこ}の手柄と判つて、徳之助の家督相續にも、お富との祝言にも、今は文句を言ふ人もありません。

左官の彦兵衛は假親を立てて貰ふやうに、強つて主張しました。——萬一自分の素姓が知れた時の用心だつたのでせう。増屋の主人は、それを世間並の遠慮と思ひ込んで、反對し續けて來ましたが、最後には折れて出て、一應増屋の親戚の養女と披露^{ひろう}し、それから改めて正式の輿入れになりました。

今日はいよく徳之助とお富の祝言といふ日。

濱町の貧しい父親の許に、暇乞^{いとまごひ}に來たお富は、近所の人達に包圍されて、暫くは、祝ひの言葉と、羨望^{せんぼう}の感動詞と、あらゆる目出度いものの渦の中にもみ抜かれました。

「まア、何て綺麗でせう」

「お富さんは本當に仕合せねえ」

「時々は濱町へもいらつしやいな」

そんな言葉の中に、盛装^{せいさう}したお富と、相變らぬ布子^{ぬのこ}一枚の彦兵衛は、唯^{ただ}おろくする

ばかりでした。

「それぢや、お父さん^{とつ}」

やがて傾^{かたむ}く陽、お富は盡きぬ名残を惜しみ乍ら、店から廻された駕籠の中に納まりました。

「お富、達者で暮せよ」

戸口まで送つて出た彦兵衛の眼には、涙が光つて居ります。

「お父さん、時々横山町へ来て下さるでせうね」

お富は美しい髪を氣にし乍ら、駕籠の中から顔を出して、咲き立ての花のやうに、四方の空氣を匂はせます。

「行くよ、行くには行くがな、——親父^{おやぢ}が娘の嫁入先へ、ウロウロ行くのは、あまり見つともいいものぢやねえ」

「でも、お父さん」

「心配するな、時々はお前も顔を見せてくれ。言ふまでもねえ事だが、夫を大事に、御主人や御隠居によく仕へるのだよ」

「ハイ」

「やれく、これで俺も安心だ。死んだおつ母アも、さぞ喜んでゐるだらう」

「お父さん」

駕籠は上がりました。親と娘を隔^{へだ}てる、町の女房、娘達、美しく華^{はな}やかな夕陽の中に、あやかりものの駕籠を、何處までも追ひます。

それを立ち盡して見送る彦兵衛。

「――」

黙つて半白の頭を振りました。涙はポロポロと、赤銅^{しゃくどういろ}色の頬を傳はつて、土間の土くを濡らします。

そつと肩に手を置く者。振返ると。

「彦兵衛」

錢形平次が立つて居るではありませんか。

「親分」

「お慈悲は過ぎたぞ、――此上のお目こぼしは、役人方の落度になる」

「覺悟は出來て居ります、親分」

彦兵衛は靜かに後ろへ手を廻しました。

「經師屋東作殺しの下手人、神妙にせい」

「親分、有難うございました。お蔭で娘は、何にも知らずに、あの通り——」

街の夕陽の中に薄れて行く駕籠、それを見送つて、彦兵衛は聲もなく泣くのです。

「笹野様の御慈悲だ——それもこれも。さア立て。」

「親分、この彦兵衛が最後の願ひ、もう一つだけ無理を聞いて下さい」

「——」

「お願いだ、親分。あの娘には、何にも知らせたくはありません。私の居ないのを不思議に思つたら、亡妻の菩提を弔ふため、西國巡禮に出た——とさう言つて置いて下さい」

彦兵衛は自分の襟に深々と顔を埋めます。

「いゝとも、この一埒は笹野様も御奉行様も御存じだ。東作はお上でも持て餘した悪黨、それを害めたところで、大したおとがめはあるめえ——お富に初孫が出来るまでには、手前も西國巡禮の旅から歸つて來られるだらうよ」

「親分、何にも言はねえ」

彦兵衛は崩折れました。合せた手が顎の下に、涙に濡れてワナワナと顫へます。

「八、見つともねえ、そんなものを引込めろ」

「へエ——」

後ろから來た八五郎は、あわてて捕縄を引込みました。どつと起る街の歡^{くわん}聲^{せい}、花嫁の駕籠を見付けた、子供達の聲でせう。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十六巻 笑ひ茸」同光社磯部書房

1953（昭和28）年9月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1938（昭和13）年増刊号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

巾着切の娘

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>